

世界トップレベルの研究者が集う 知の「梁山泊」で世界的拠点に

「世界のトップレベルの研究者が集い、成果を生み出す拠点に」。4月、名古屋大学総長に就任した杉山直氏はその抱負に力を込める。物理、天文、化学、生物、医学…名古屋大学の「強み」を中心にさらには岐阜大の強みも生かした連携を視野に世界的な「知の拠点」を目指すという。宇宙論が専門の新総長の夢は宇宙並みに壮大だ。(聞き手は塚本隆・編集長)

——第15代総長就任の感想をお聞かせください。

杉山総長 責任の重さを痛感しています。大学の舵を取っていくというのは重大で、仮に間違えると大変なことになるからね。

ただ、チャレンジという意味では、ワクワクしている面もあって名大を少しでも良くしたいという期待感を持っています。

——チャレンジとは。

杉山 名大は歴史のある大学ですが、国立の総合大学としては9学部、13研究科と規模は小さい方です。しかし、小さいながらも世界でのトップレベルを目指して、きちんと存在感を出したい。世界、日本、地域のいずれでも存在感を示していく挑戦が重要です。

大学には研究、教育、そして社会連携という3つの使命がありますが、いずれもトップレベルまで高めていかなければ、と思っています。

——世界最高水準の研究目標は。

杉山 名大には、強みがある分野がいくつかあります。まずはその分野を中心に拠点化してさらに強めていきたいですね。世界的に上位にいるのは、例えば物理学・天文学、化学、生物学です。化学と植物学を中心とした生物学が融合しているITbM(トランスフォーマティブ生命分子研究所)という世界最先端研究拠点もあります。また、医学・生命系ではさらに、神

経科学や生化学・分子生物学などが強いですね。これらに加えて、地球科学、惑星科学も上位にいます。宇宙と地球の境界を主たる研究対象にしている宇宙地球環境研究所は世界に存在感を示しており、火山・地震の研究者も充実しています。

——拠点化のポイントは。

杉山 名大にとって、研究力を伸ばしていくことが「一丁目一番地」だと思っています。そこでは、まず学術的な成果において世界のトップを目指すことが求められます。そのための仕掛けとして、世界トップレベルの研究者がそこに集い、世界が注目する研究成果が続々と生み出される場所を構築する、それがここで目指す「拠点」です。拠点を中心に名大が生み出す「知」を集積していくこと、これが大学としての最も重要な使命の一つだと考えます。そのために、基礎・基盤研究を統合する機関として、2019年10月に「国際高等研究機構」という組織を立ち上げました。この機構に、拠点を集約していくことになると思います。

また、集めた知をどう社会連携、そしてイノベーションに繋げていくのが次の大きな課題となります。

——社会連携はどう進めますか。

杉山 大学の知を社会のために生かすという社会連携では、企業がこれまでであれば単独で



杉山直 (すぎやま・なおし)

1961年7月生まれ。84年早稲田大学卒業。86年同大学院修士課程修了。89年広島大学大学院博士課程修了・理学博士。91年東京大学助手。96年京都大学助教授。2000年国立天文台教授。06年名古屋大学教授。19年名古屋大学理事・副総長。20年東海国立大学機構理事、名古屋大学副総長。22年4月から東海国立大学機構大学統括理事・副機構長、名古屋大学総長。専門は理論天文学、天体物理学、宇宙論。神奈川県出身。

もやってきた短いタイムスパンの課題を、大学との共同研究という形で進めていくことが、最近極めてよく機能するようになってきました。ただそれだけではなく、大学ならではの少し長いタイムスパンで考えた課題解決を進めていくことも重要となります。社会連携では、企業や自治体と連携して社会変革、イノベーションを成し遂げていかなければなりません。一例を挙げればカーボンニュートラルの実現などになります。そのための組織として、名大では「未来社会創造機構」を2014年に設立し、社会連携のフラッグシップとしての役割を果たしています。

——名大の存在感をどう高めていきますか。

杉山 総合大学として名大は小さい規模ですが、得意な所を浮き彫りにしながら、決断が早く身が軽いところをアピールすることで存在感を示せると思っています。大きな大学ではどうしても改革のスピードが遅くなりますが、名大は非常に機敏に改革に取り組みています。例えば、2年前の岐阜大学(以下「岐阜大」と)との経営統合による東海国立大学機構の設立です。

こうした機敏な動きは、他の大規模大学ではなかなかできていません。意思決定が非常にスムーズで、その辺が名大の良さであり、存在感を出しやすい点かな、と思います。研究であれば、迅速な意思決定で、戦略的に強化する分野を決めて、世界に打ち出していく、ということですね。

——新型コロナウイルスの影響は。

杉山 当初は大学閉鎖に近い状況になったこともあり、実験をすることが困難になるなど、研究にも大きな影響が出ましたが、結局は、教育面が一番影響を受けました。ご存知の通り、新型コロナウイルス感染症が大きな問題となることが明らかになってきたのは、2年前、2020年の3月ごろでした。その時点では、春休み中ということもあり授業がなかったのですが、学会等の中止は相次ぎ、4月の新学期スタート時には大変なことになるという予想が立ちましたので、急遽全ての授業をオンラインでできるように1カ月足らずで一気に整備し、オンライン授業をスタートしました。当初は学生側にも先生方にも戸惑いがありましたが、その割に